【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	福 井 県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	敦賀市立松原小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	２	２	３	２	３	１	１６	２４
児童数	８７	６７	７２	８３	７７	８７	３	４７６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

確かな学力の育成をめざして
── 個に応じた指導の手だての確立 ──

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

☆１年生～２年生におけるＴＴでの支援を取り入れた算数科の研究
☆３年生～６年生における少人数指導を取り入れた算数科の研究
☆５年生での理科および社会科の教科担任制の実施

＜理由＞

習熟度に個人差が大きく表れることから教科は算数科を中心に研究実践に取り組むことにした。また、算数科では、指導者のみならず児童自身が「できた」「わかった」と学習内容の理解・習熟を把握できると考えられる。

また、教科担任制については、学年内の学級数・児童の発達段階・時数を勘案して、５年生の理科および社会科で実施することにした。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○ テーマ　　確かな学力の育成をめざして
── 個に応じた指導の手だての確立 ──

○ 研究の見通し

（1）確かな学力を身に付けるための授業改善

・４５分間の算数科の学習の流れの基本形を確立することにより、教師が場面を想起して授業づくりに取り組むことができるとともに、児童が見通しを持って学習活動に取り組むことができると考えられる。

・単元を見通した上で、毎時間の課題・中心問題を予め設定しておくことにより、児童が意欲的・主体的に学習に取り組む授業が構築できると考えられる。

（2）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

・１～２年生の算数科にティームティーチングを取り入れることによって、

きめ細かに個を支援することができると考えられる。
・３～６年生の算数科に習熟度別コース編成による少人数学習指導を取り入れることによって、基礎・基本の確実な定着と発展的な学習を図ることができると考えられる。

（３）個に応じた指導のための教材開発
・基礎的・基本的学習内容の定着を図るための教材を開発して活用することにより、児童のつまずきを解消する効果が期待できる。
・発展的な学習のための教材を開発して活用することにより、児童の意欲を喚起するとともに、児童に応用的な考え方を身につけることが期待できる。

○ 研究の内容・方法

（１）確かな学力をつけるための授業改善
①算数科の４５分間の授業の流れの基本形を確立し、この基本形を活用して授業づくりに取り組む。児童の学びへの意欲を喚起し、見通しを持った学習が成り立つようにする。
②毎時間の課題・問題一覧表をパソコン入力して作成し、これを活用して魅力的な授業を組み立てる。学習過程の中で、学年担当者間で共通理解を図るとともに、児童の習熟レベルにあわせた授業づくりを心がける。また、児童が学習にのめり込んでいくような問題の提示をねらう。
③低・中・高学年をそれぞれ１つずつの「学団」と位置づけ、授業づくりを協力して行う。学年ごとに年間１回ずつの全校への公開授業をし、全職員での研究協議を行うことにより、教師自身の授業づくりの力を向上させる。

（２）-１　ティームティーチングでの指導のあり方
①１～２年生の算数科では、各学級にＴＴ担当教員が入り、毎時間ＴＴによる指導をする。
②ＴＴによる様々な支援パターンを明らかにし、学習のどんな場面でどんな支援分担をすると効果的であるかを明確にしていく。
③学年内でのＴＴ教員との打ち合わせの時間を確保する方法を検討する。

（２）-２　少人数指導法の工夫
①どのようなコース分けのパターンが可能かを明らかにし、学年の発達段階や学習の内容に応じて使い分けられるようにする。
②適切なコース分けのあり方を探る。レディネステストやコース希望調査を活用して、児童の要望を生かしながら効果のあるコース分けができるようにする。
③習熟度別コース編成を取り入れ、児童の実態に即した学習が構築できるように効果的な指導法を研究する。
④学年担当者・少人数担当者間での打ち合わせの時間を確保する方法を検討する。

（３）個に応じた指導のための教材開発
①基礎的・基本的学習内容を定着させるための教材（プリント等）を開発する。
②児童のつまずきを発見して、その部分をフォローできる指導のあり方を探る。
③発展的な学習のための教材（問題）を開発して、習熟度別コース等で児童が意欲をもって学習に取り組めるような活用法を検証する。

平成16年度

○ テーマ　　確かな学力の育成をめざして
― 個に応じた指導の手だての確立 ―

○ 研究の見通し

（1）確かな学力を身に付けるための授業づくり

・３ステップの学習過程を基本形として授業を組み立てることにより、教師が場面を想起して授業づくりに取り組むことができるとともに、児童が見通しを持って学習活動に取り組むことができると考えられる。

・課題・中心問題一覧表を活用して毎時間の授業を組み立てることにより、児童が意欲的・主体的に学習に取り組む授業が構築できると考える。

（2）個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

・１～２年生の算数科に典型化された分担によるティームティーチングでの支援を取り入れることによって、短時間の打ち合わせでもより効果的に個を支援することができると考えられる。また、児童もＴＴでの関わりを意識した主体的な学習ができていくものと期待できる。

・３～６年生の算数科に習熟度別コース編成による少人数学習指導を取り入れることによって、基礎・基本の確実な定着を図ることができる。また、児童の習熟度に対応した学習の流れが構築でき、児童自らが積極的にはたらきかけていける学習活動が成り立つものと期待できる。

（3）個に応じた指導のための教材の開発と活用

・計算等の習熟のために、学年の枠を解いた系統的な補充用プリントを作成して活用することにより、児童のつまずきに即座に対応し、学習レベルを向上していける効果が期待できる。

・発展的な学習のための教材を開発して活用することにより、児童の意欲を喚起するとともに、応用的な考え方が身につけられることが期待できる。

（4）児童の学びの評価を生かした指導の改善

・ノート指導を充実し、自己評価・相互評価の工夫をすることにより、児童の学びの足跡を適切に把握し、次の指導に生かすことができると考えられる。

・学習の事前・事後の実態把握を行うことにより、児童の学習内容の定着度が把握でき、効果的な指導に結びつけることができると考える。

○ 研究の内容・方法

（1）確かな学力を身に付けるための授業づくり

①３ステップの学習過程を意識して学習活動を組み立て、それぞれの学習場面でどのような指導・支援をするとよいかを明確にしておく。さらに児童もこれを意識することによって、見通しを持って主体的に学習に取り組むことができるようにする。

②平成１５年度に作成した課題・問題一覧表をもとに、毎時間の課題・中心問題を適切なねらいを意識して決定し授業で活用する。児童が自然とのめり込んでいくような魅力的な問題を投げかけることをめざす。

③特に習熟度別コース編成による少人数指導において、補充的・発展的学習を取り入れて児童の基礎・基本の力を向上させるとともに、意欲を持って難問にも挑んでいく姿が見られるようにしたい。

（2）-1　ティームティーチングでの指導のあり方

①明確にしてきたＴＴのパターンの中から、学習の内容に応じてそれぞれの利点を生かして選択する。

②３ステップの学習過程において、各場面でのＴＴの分担を典型化し、短時間の打ち合わせでも意思疎通が図れるような工夫を探る。

（2）-2　少人数指導法の工夫

①少人数指導のコース分けのパターンの中から、学年・単元の学習内容に応じて使い分けて活用する。
②レディネステストやコース希望調査などのコース編成のあり方についてさらに研究を進める。
③習熟度別コースのそれぞれのコースにおいて、児童に合わせた学習の流れを組み立てることにより、効果的な学習活動を創り上げる。

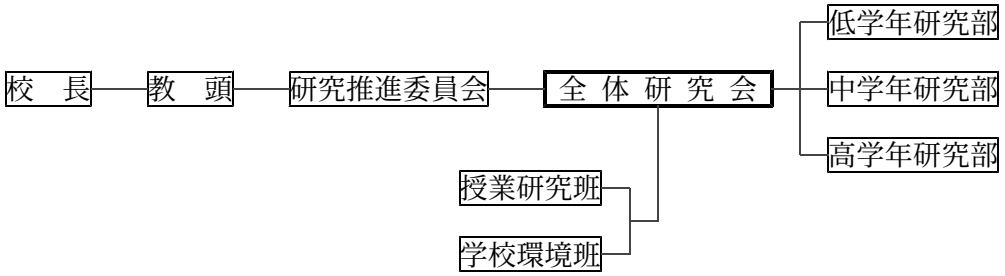
（3）個に応じた指導のための教材の開発と活用

①補充的なプリントとして「ステップアッププリント」を作成し、これを活用して児童のつまずきに即座に対応していく指導システムを確立する。授業中の活用、補充的な学習時間での活用など、有効な方法を探る。
②発展的な教材については、主に少人数の「チャレンジコース」で取り扱うこととし、プリントなどを作成する場合は共有できるような保管方法の確立をめざす。

（4）児童の学びの評価を生かした指導の改善

①自己評価の書き込みなどノートの書き方を見直し、指導を充実することにより、児童の学習の定着度の評価とともに、授業評価にも役立てる。
②児童理解を深めＴＴや少人数指導がより効果的に作用するために、レディネステストを内容を吟味しながら活用する。
③基礎・基本の定着の評価として、学習コンテストを定期的に実施する。

(3)　研究推進体制



※研究推進委員会で計画立案した内容を、授業研究班・学校環境班を中心にして具現化していく。
※実際の授業づくりを協力して行う組織として学団研究部を設置する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（1）確かな学力をつけるための授業改善

○３ステップの学習過程

算数科の学習の過程を、次のように３ステップで組み立てるようにしてきた。

第１ステップ … 自分で取り組む時間（問題把握・自力解決）

課題をつかむ　　問題の意味を確かめる
既習事項を生かして考えてみる　　自分の力で解いてみる

第２ステップ … みんなで考える時間（交流・深め合い）

考えを発表し合う　　全体で話し合う　　よりよい方法を見い出す

第３ステップ … **自分でふり返る時間（練習・ふり返り）**

わかったことをまとめる　　練習問題に取り組む

次の学習への意欲を持つ

この３ステップの学習過程を意識して授業づくりをしていくことで、教師から指示・提示する場面、児童の主体的な学習を支える場面が明確になり、ポイントを絞って学習活動を組み立てることができた。また、児童に１時間の授業の学習過程をつかませることにより、児童が見通しを持って学習に取り組んでいけるようになった。

○課題・問題一覧表の作成

毎時間の授業での学習課題および中心問題は、各学級担任及びＴＴ・少人数担当者間で打ち合わせをして作成した。この課題・問題は一覧表としてパソコン入力し、常時閲覧できるようにした。これによって、担当者間の共通理解が図られるとともに、ねらいを明確にした計画的な授業づくりが可能になった。また、他学年の課題・問題も参考にすることができ、常に全職員での情報交流を果たすことができるようになった。

（２）−１　ティームティーチングでの指導のあり方

ＴＴは１～２年生の算数科の授業で毎時間実施している。**分担ＴＴ**、**協同ＴＴ**、**学年ＴＴ**など考えられる指導形態を明確にし、学習の内容に応じてそれぞれの利点を生かして取り入れられるようにしてきた。現在では、基本的に学級枠は解かずに、個に応じたこまめな指導をめざしている。

全体で本時の中心問題の意味を確かめる場面（**問題把握**）や話し合い活動により考えを深める場面（**交流・深め合い**）では、主に**分担ＴＴ**のパターンで支援し、Ｔ２が個別に支援が必要な児童に関わるようにしてきた。このような連携によって、教師１人での一斉指導では十分に力を発揮できない児童に学習への意欲を持たせたり、計算や図形の操作ができるようになったりする効果が認められている。

また、問題を自分の力で解いてみる場面（**自力解決**）や本時の学習内容の定着を図るための練習問題に取り組む場面（**練習・ふり返り**）では、主に**協同ＴＴ**の手法を取り入れて、学級児童を半々に受け持つ形で支援にあたるようにしてきた。このことにより、教師の手が２倍になることで、より素早くきめ細かな個別支援が可能になっている。評価にかける時間が短くなることで、児童を待たせることが減り、能率よく学習が進んでいる。

さらに、２年生では、考えを深め合う話し合いの場面で、Ｔ１が全体を指導している中で、Ｔ２が児童の考えに揺さぶりをかける発言をして、話し合い活動を活性化していく方法も試みている。

（２）−２　少人数指導法の工夫

少人数での指導は、単に学習集団の人数が減ることによる教育効率の改善だけでなく、特に習熟度別のコース編成による指導は、これまでの実践からもその教育効果が多く挙げられてきた。そこで、算数科の学習に習熟度別のコース編成を取り入れて実践研究を進めてきた。

コース分けにあたっては、レディネステストとコース希望調査を単元のはじめに行い、それをもとにコース編成を考えていくようにしている。コースの編成は、次のようなパターンの中から、学年・単元の学習内容に応じて使い分けている。

Ａ 均等割コース分け

…学年全体を習熟度の均等な４つのグループに分けて学習を進める。

Ｂ 習熟度別コース分け

…学年全体を習熟度の段階に応じて４つのグループに分けて学習を進める。
「じっくりコース」「ちゃくちゃくコース」「チャレンジコース」など。

Ｃ 補充的習熟度別コース分け

…学年全体の中から補充的な学習が必要な児童を少人数担当者が受け持ち、その他の児童を各学級ごとに学級担任が受け持つ。

D 発展的習熟度別コース分け

…学年全体の中から発展的な学習を進める児童を少人数担当者が受け持ち、その他の児童を各学級ごとに学級担任が受け持つ。

習熟度別のコース編成によって、ある程度レディネスが揃った児童の集団に対して学習を組み立てることができた。具体的には、その時間の学習の中心問題をコースごとに難度を変えて提示したり、１時間の学習の流れを児童のレベルに合わせて工夫したりしてきた。その効果として、通常の学級集団ではなかなか意見が言えない児童が少人数の「じっくりコース」で生き生きと発言している、「チャレンジコース」では難度の高い問題に意欲的に取り組んで自分の考えをしっかり説明できる機会が増えている、などが挙げられている。

(3)個に応じた指導のための教材開発

ティームティーチングや少人数指導によって個に応じた指導を効果的に行うためには、教材の開発が不可欠な問題として浮き上がってくる。基礎・基本的な事項を定着させるために、よりわかりやすく具体化した教材を活用する必要が出てきた。また、少人数指導等で発展的な学習にチャレンジする児童には、より発展的な課題等を開発していく必要が出てきている。

これらの教材開発は、これまで教師個人として行う場合が多かったが、今年度からは、学年内で、また場合によっては学年を超えて、組織的に行っていくようにしてきた。さらに、開発された教材・教具などを、共有の財産として適切に保管しておけるような環境の整備が始まっている。

現在取り組んでいるのは、基礎・基本を充実させるための小プリントの作成である。児童のつまずきに対応するためには、既習事項を確かめてみる必要があるが、その内容は学年をさかのぼって戻ることが少なくない。そこで、主に計算の習熟に絞って、系統的な補充用プリントを作成している。これは、全学年のものを共通の場所に設置しておき、必要に応じてどの学年の児童も使うことができるように整備を進めている。これにより、学年の枠を超えて既習事項を即座に復習することが可能になり始めている。

(4)児童の意識調査結果から

Q 算数は好きですか？（全校児童に５月・１２月に調査）

	好き	どちらでもない	きらい
5月調査結果	５１．２％	２９．１％	１９．７％
12月調査結果	５５．７％	３１．２％	１３．１％

Q 算数の授業はどのくらいわかりますか？（全校児童に１２月に調査）

	よくわかる	だいたいわかる	半分ぐらいわかる	わからないことが多い	ほとんどわからない
12月調査結果	29.6%	50.2%	15.3%	3.0%	2.0%

Q 算数の授業は楽しいですか？（全校児童に１２月に調査）

	とても楽しい	楽しい	どちらでもない	あまり楽しくない	楽しくない
12月調査結果	34.2%	32.6%	19.6%	10.3%	3.3%

２．今後の課題

○授業改善に関して
・問題解決学習で、児童が考えた多様な解決方法を、話し合いによって深めながら、算数的により優れた方法へと導いていくためには、教師が話し合い活動のコーディネーターとして力を発揮しなければならない。その意味で、我々の授業力を磨いていかねばならない。
○ＴＴでの支援に関して
・学習過程の場面に応じたＴ１とＴ２の効果的な連携のあり方を典型化し、不足がちな打ち合わせの中でも毎時間効果的にＴＴの連携がとれるようにしていきたい。
○少人数指導に関して
・より望ましいコース分けのあり方とそのためのレディネステストや希望調査のしかたを探っていくとともに、資料として共有化できる保管方法を決めていきたい。
・「じっくりコース」でも無理のない話し合い活動による深め合いを進めるために、どのような工夫をしていくとよいか探っていきたい。
○評価を生かした指導に関して
・ノート指導を充実し、学習の評価として活用していきたい。
・指導と一体化できる評価のために評価規準を見直していく必要がある。
・ＴＴや少人数指導で、児童個人の評価を効率よく情報交換する方法を探っていきたい。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

（1）レディネステスト
　算数科の各単元の学習のはじめに、その単元の学習内容に関わる既習事項について、定着度をはかるテストを実施している。
　実施学年は３～６年生である。
（2）単元末テスト
　４教科の各単元の学習後に、その単元の学習内容の定着度をはかるテストを実施している。
（3）学習コンテスト
　毎学期末（７月・１２月・３月）に、その学期に学習した内容の定着度をはかる取り組みとして全学年で実施している。実施教科は、１～２年生が国語科・算数科、３～６年生が国語科・算数科・社会科・理科の４教科である。
（4）学力テスト
　県の学力テストおよび市の学力テストにより、児童の全体的な学習の定着度をはかり、以後の指導に生かすようにしている。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成１５年１１月１９日　公開授業研究会
◇１年生算数科（ＴＴによる支援）
◇６年生算数科（習熟度別コース編成による少人数指導）
平成１５年１１月２７日　嶺南地区教育充実研修会における実践発表
◇分散会にて嶺南地区の各小中学校研究主任に対して本校の研究実践を報告
平成１６年１月２３日　教務主任研修会における実践発表
◇嶺南地区の教務主任研修会にて本校の研究実践を報告

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
☑１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☑一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無